立ケ花西原遺跡発掘調査報告

中野市教育委員会

立ヶ花西原遺跡発掘調査報告

中野市教育委員会

1　発掘調査に至るまでの経過

中野市立ヶ花字西原は、主に縄文時代前期と古墳時代の複合した遺跡である。この遺跡は過去何回かの発掘調査が行われている。この遺跡の西原50ノ1に地主小林角兵衛氏が共同住宅新築を計画され、この埋蔵文化財保護のため、一九九三年八月九日、この工事によって破壊される恐れのある箇所について試掘調査を行った。ついでこの保護協議を現地で一〇日に、調査団金井汲次、檀原長則、教育委員会小古井社会教育課長、同山口補佐、歴史民俗資料館徳竹学芸員と地主小林氏を交えて前日の試掘調査の結果を参考にして協議を行った。この結果、建物部分については、遺跡面に五〇㌢以上の盛土工事を施工済みのため、これを除いた擁壁と汚水処理施設の工事箇所について、発掘調査を実施することが決まった。

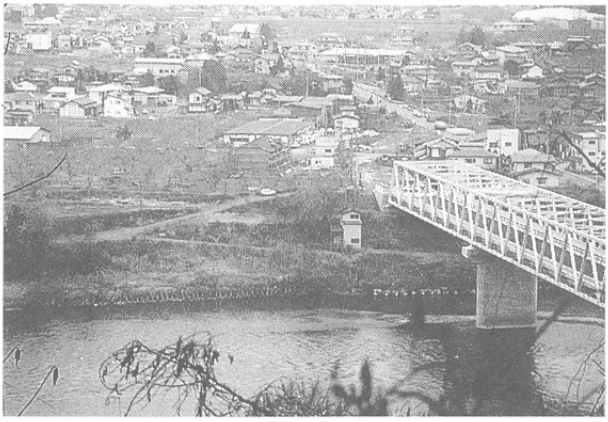

写真１　豊野町から見た立ヶ花遺跡
（調査地建築中の建物の所）

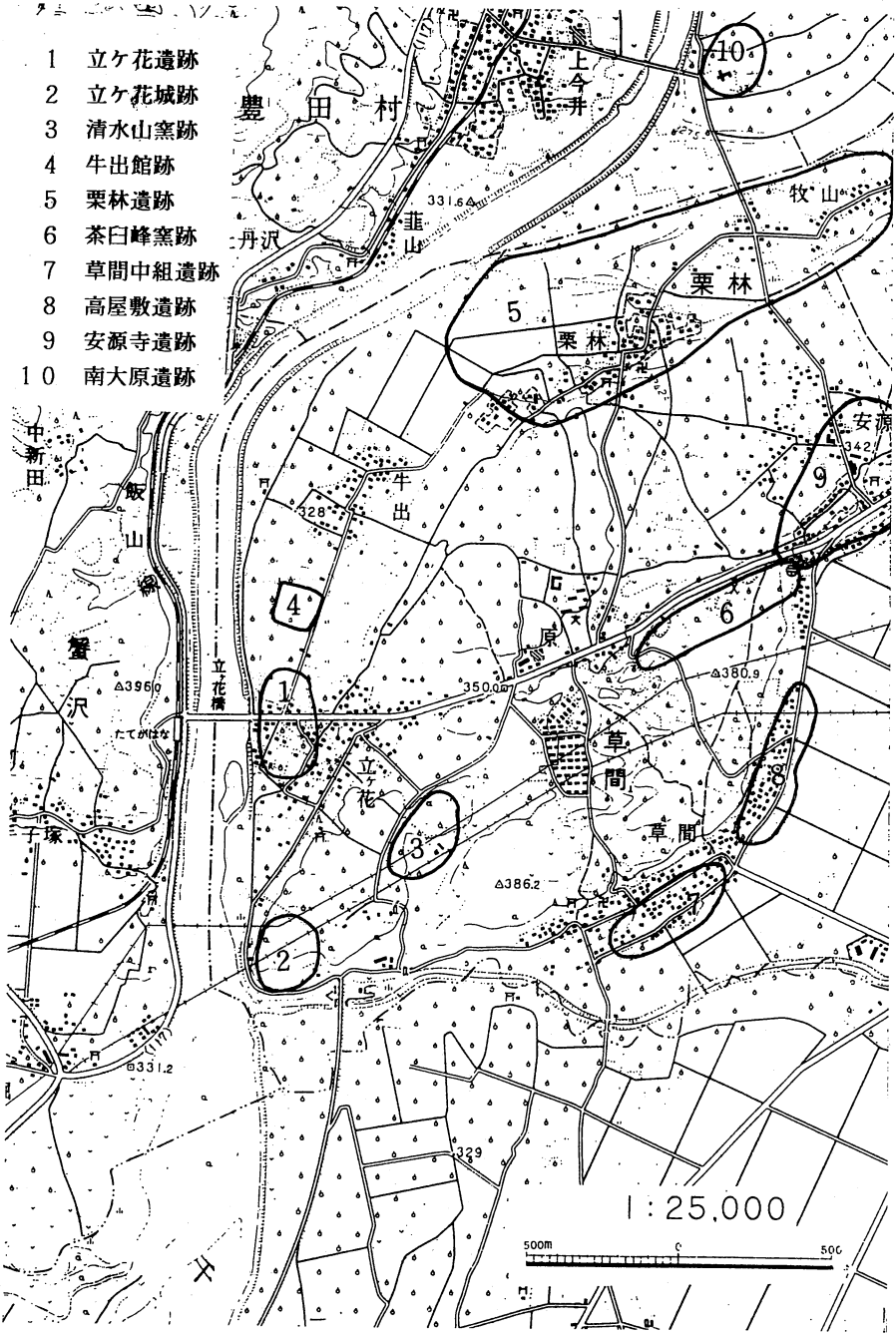
1　立ケ花遺跡
2　立ケ花城跡
3　清水山窯跡
4　牛出館跡
5　栗林遺跡
6　茶臼峰窯跡
7　草間中組遺跡
8　高屋敷遺跡
9　安源寺遺跡
10　南大原遺跡
豊田村
上今井
牧山
栗林
丹沢
韮山
牛出
中新田
飯山
蟹沢
立ケ花橋
たてがはな
子塚
立ケ花
草間
安源
1:25,000
500m
0
500

図1　周辺の主な遺跡

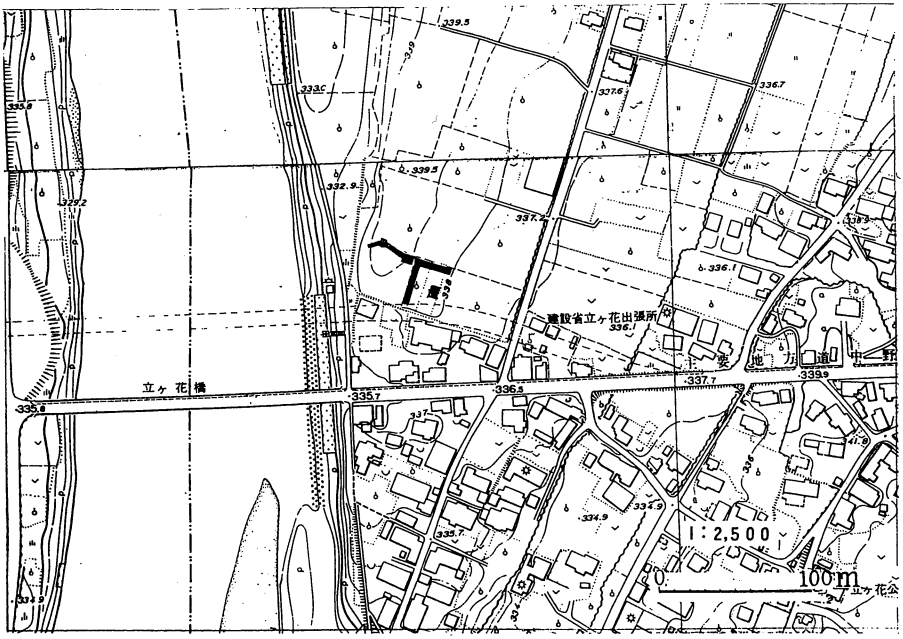

図2　立ヶ花遺跡位置図

2　調査団の編成

この遺跡の発掘調査団の編成は次のとうりである。

団　　長　金井汲次
調査主任　檀原長則
調査員　池田実男
事務局　中野市教育委員会
　社会教育課長　小古井嘉幸
　同課長補佐　山口耕一
　歴史民俗資料館
　　学芸員　徳竹雅之
作業員　湯本栄一　樋口義政　金井英男　檀原みち江
　池田正子　池田きよ子　秋山恒巳　常田　誠
整理作業　檀原長則の総括のもとに、池田実男　湯本栄一
　檀原みち江　池田正子　池田きよ子　山崎のり子
　が行った。

3　位置と景観

この立ヶ花西原遺跡は、平成元（一九八八）年と同二年に新立ヶ花橋建設に伴う取り付け道路内の発掘調査を行い、平成三年（一九九一）年調査報告書が刊行されている。この中

に標題の項目について大略述べられている。

しかしその後三年間の建設事業の進展はめざましく、新立ヶ花橋の橋梁の大半は、現立ヶ花橋に比べて水面上五㍍高く建設され、ＪＲ飯山線上の橋梁工事を残して完成を見ている。

また上信越高速自動車道の建築工事も平成六年の立ヶ花インターまでの開通予定に合わせて、採土工事、路盤工事で日々景観が変貌しており、インター周辺の整備も進みつつある。

またこの先線は県埋蔵文化財センターによる発掘調査が進み、中野市～豊田村間の千曲川に架かる鉄橋の基礎工事が始まり、平成一〇（一九九八）年開催の長野五輪に合わせた、道路建設（志賀～中野道路）もインターから七瀬までは、遠からず開通が予定されている。

このような関係から民間の住宅の新築も今回の調査箇所を含めてほかにも盛んに行われ、ここも前回調査地（道路）の北に隣接した位置にあり、さらにその西方で一二月から一九九四年一月にかけて揚水場建設に伴う発掘調査を行ったが、これは別に報告の予定である。

立ヶ花西原遺跡は、「中野市遺跡詳細分布図」１１６で、千曲川に沿った右岸の自然堤防上に位置し、南北三五〇㍍、

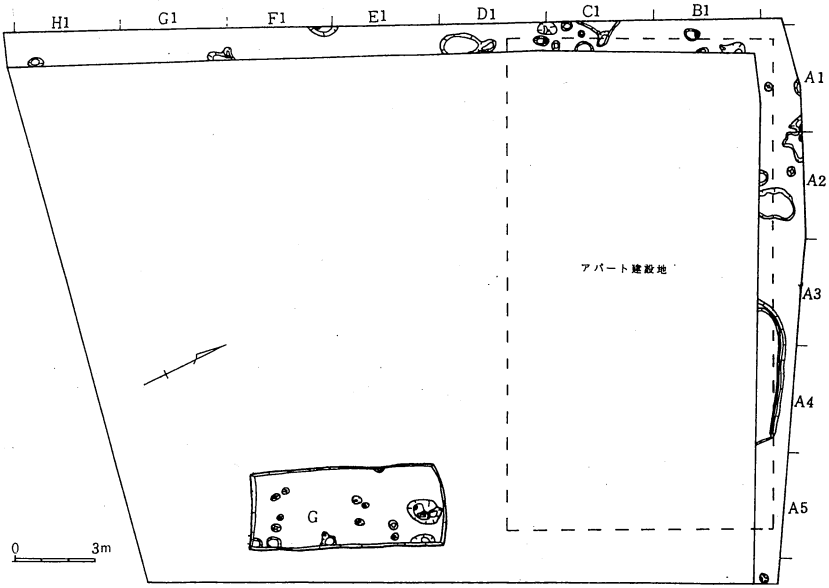

図3　調査全体図

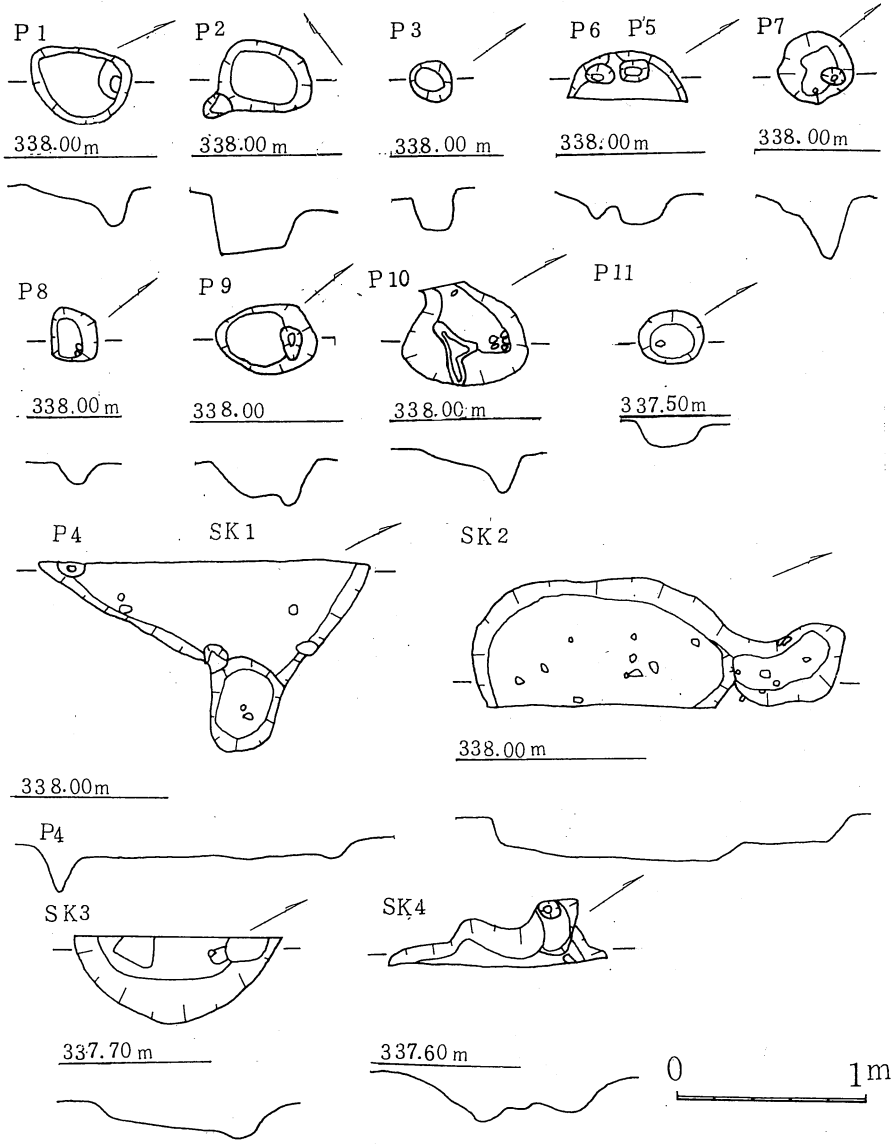

図4　土坑ピット実測図（1）

東西一二〇㍍の範囲にある。この遺跡の年代は主に縄文時代前期後半と古墳時代前期の複合遺跡である。

この遺跡の東北には本誓寺跡（117）があり、室町時代中期に真宗のお寺があったと、新潟県上越市高田の「本誓寺文書」に記され、西部畑地灌漑のパイプ敷設工事で、この推定地から組合わせ式五輪塔に梵字が刻まれたものが多数発見されている（未報告）。

遺跡につづく北方の牛出地籍には、戦国期の館跡が比較的よく残っており、西北角の土塁には横矢がかりの施設がみられる。

このように遺跡は、太古から流れる母なる川、千曲川のほとりに位置し、北半分は果樹園地帯のため保存されているが、南半分は道路、堤防、道路、住宅建設のため、遺跡が破壊され、環境が大きく変貌を遂げようとしている。

4　層序

長野県北部は新生代第三紀・中新生（約三五〇〇年前）にできたフォッサ・マグナ（糸魚川～静岡構造線）の一部に属する。この地溝帯は、その後火山活動などで隆起を続け、陸化するとともに、第四紀（約二〇〇万年前）の火山活動などによって、東部山地の山々は次第に現在の姿になった。

千曲川は立ヶ花から古牧までの約一四㌔は河岸段丘が発達している。これは流路がきまってから、途中が隆起するために起こった現象である。

立ヶ花西原遺跡はこの千曲川の右岸の長丘丘陵（西部丘陵）にあって、その上部は粘土質土におおわれている。この丘陵地域に分布する地層は、下位より大川層・屋敷層・豊野層・平出層である。

この河岸丘は高位より、赤塩面・長丘面・草間面・原面・栗林面の五段に区別されている（中野市誌自然編1981）。

栗林面は沖積面で海抜標高三四〇～三五〇㍍で、この遺跡の発掘調査面は三三八㍍である。

この長丘面と草間面からは後期旧石器時代のナイフ形石器が浜津ヶ池・安源寺・立ヶ花表遺跡などから発見され、原面からも一九九三年における県埋文センターの高速道発掘調査で検出されている。

この遺跡の調査地の堆積層は、1表土（耕作土）2黒褐色土3黒色土4黒褐色と黄色混合土5黄色土（砂含む）6黄色土（粘質土）となっており、千曲川の自然堤防にあるため、川（西）面は当然急崖をなし、黒色土の堆積は少なく、内（東）面は緩やかに低く傾斜しているため、東に向かって黒色土が厚く堆積している。

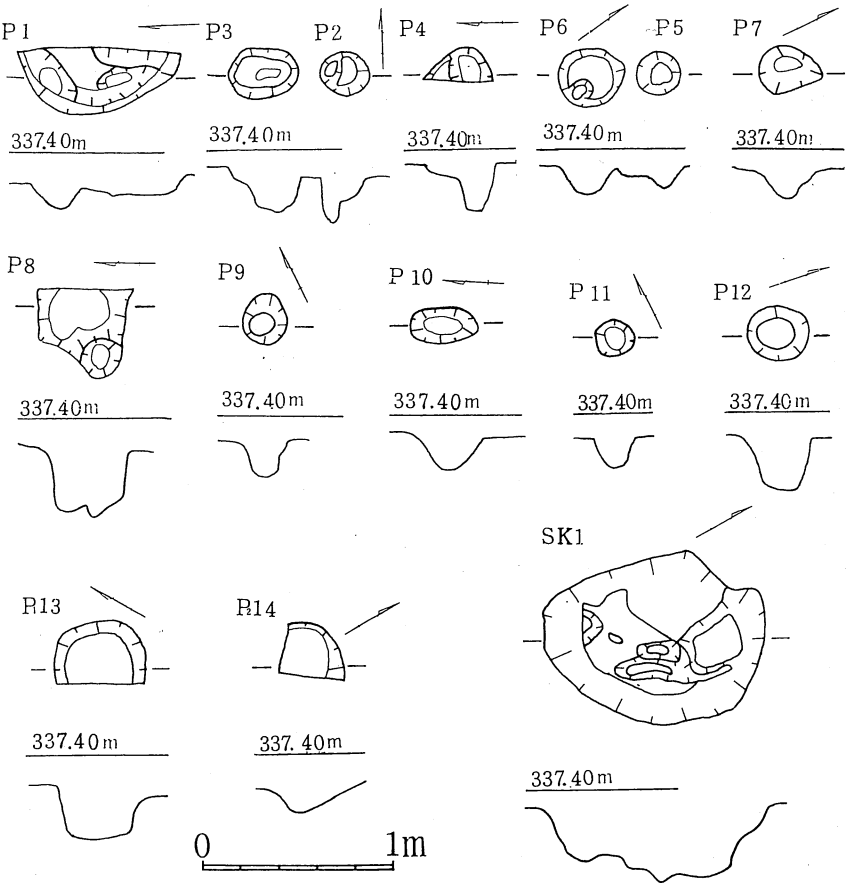

図5　土坑ピット実測図（2）

表1　　土坑（壙）計測表

番号	図版番号	遺構番号	長経	短経	深さ
1	4	C1－SK1	73cm	59cm	12
2	4	D1－Sk2	194	68	20cm
3	4	F1－SK3	112	59	16
4	4	F1－SK4	68	33	24
5	5	G －SK1	118	92	40
6	6	A2－SK1	172	74	27
7	6	A2－SK2	119	105	15

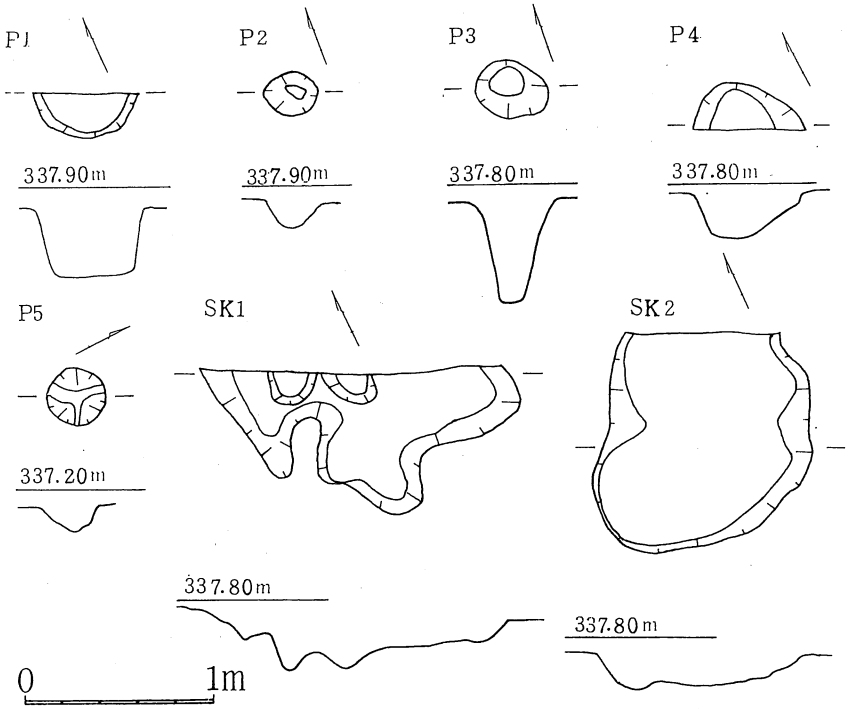

図6　土坑ピット実測図（3）

このため頂点付近の遺構以外の遺物包含層は4黒色土までの四〇㌢までの深さである。さらに5黄色土までは、砂が多く含まれた堆積土であった。

5　遺　構

今回の調査は該当敷地面積約五四六平方㍍の内、遺跡破壊の恐れのある限られた範囲の合計約六八、五平方㍍ため、遺構の確認は僅かで、まとまりも欠いている。このうち縄文時代前期に属すると思われる遺構は、土坑と柱穴などで、後者については古墳時代の遺構と重なっているため、所属年代については、検討を要し、大きさなどは第二表に示し、ここでは詳説をくわえない。

土坑は長径一㍍前後の大きさからその範疇とした。この中には貯蔵穴、墓壙などの識別が必要と思われるが、これらの第一表に示した土坑から諸磯式b式平行土器を主としc式平行段階までの土器が包含されており、特に両者に識別できる。遺構・遺物の出土状態を示していなかった。以上のことからどちらかというと、貯蔵穴としての性格

表2　　ピット計測表

番号	図版番号	遺構番号	長経	短経	深さ
1	4	B1－P1	53 cm	42 cm	18 cm
2	4	C1－P2	48	34	32
3	4	C1－P3	23	20	21
4	4	C1－P4	18	12	19
5	4	C1－P5	15	12	14
6	4	C1－P6	14	11	9
7	4	C1－P7	40	38	32
8	4	C1－P8	30	24	10
9	4	D1－P9	53	38	26
10	4	D1－P10	66	61	18
11	4	H1－P11	35	30	14
12	5	G－P1	91	35	16
13	5	G－P2	25	24	27
14	5	G－P3	39	29	23
15	5	G－P4	37	19	26
16	5	G－P5	26	25	15
17	5	G－P6	36	34	11
18	5	G－P7	36	28	17
19	5	G－P8	48	47	36
20	5	G－P9	29	24	21
21	5	G－P10	37	21	20
22	5	G－P11	22	18	16
23	5	G－P12	34	28	26
24	5	G－P13	47	36	26
25	5	G－P14	33	40	10
26	6	A1－P1	59	24	35
27	6	A1－P2	28	25	13
28	6	A2－P3	41	27	55
29	6	A2－P4	57	25	23
30	6	A6－P6	33	32	13

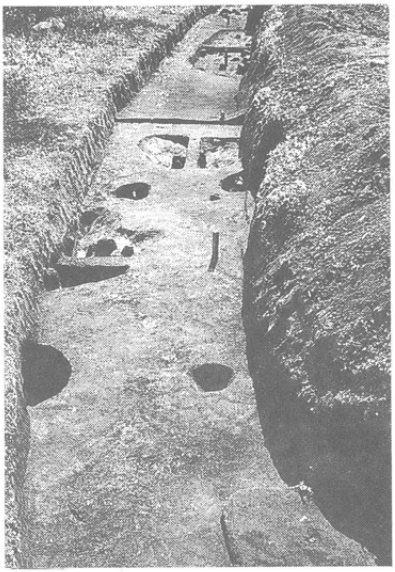

写真3　西から見たＢ１～Ｂ４の遺跡

写真2　南から見たＨ１～Ｂ１

が強いのではあるまいか。俎上する鮭など魚類の貯蔵、どんぐり、栃の実のあく抜きと貯蔵などの用途が考えられる。

つぎに縄文時代の土器と遺構のありかたをみると、Ｈ―１グリット（以下グリットを略す）からは諸磯式第六様式（ｂ式中段階）（谷口一九八九）の浅鉢（図11・2）が検出されている。これは屈折のある外面に縄状の刻みを伴うものである。この周辺からは土器片が一〇片程検出されている。

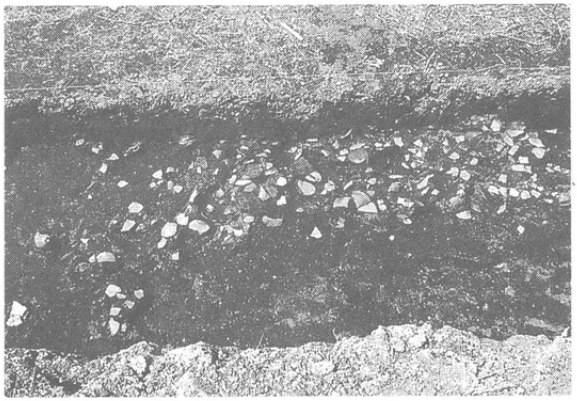

写真4　Ｂ１の土器出土状況

Ｇ―１からは土器片が一〇片ほど検出され、Ｆ―１からもほぼ同量の土器片がみられたが、Ｆ―１では一三片が空白をおいて検出され、Ｅ―１には八五片が集中して検出された。

この中には諸磯式ｂ式新設階

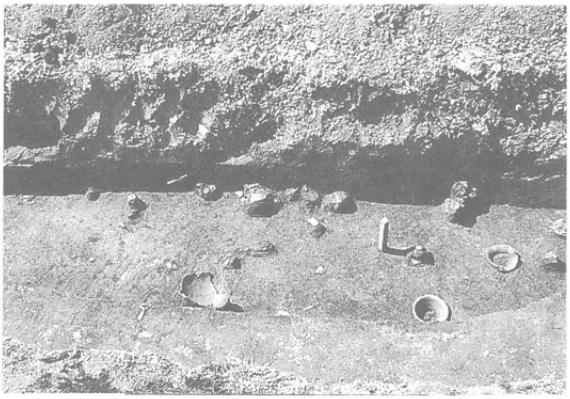

写真5　古墳時代住居址の遺物

かc式古段階（同前）の浅鉢（図11・1）があり、外面屈折部に縦に四条の沈刻のみられるものであり、他の土器片もほぼ同じ時期のものと推定される。ここには土坑二基、ピット八基などがみられ、住居址の一部ともみられるが、明確にはできなかった。

D—1の土器片出土は、散発的に三二片検出されたが、ここでは石器材料の剝片が約四〇片、集中して検出されている。

C—1では土器片が六九片が西方に偏って検出され、石匙（図15・5）が検出されている。B—1は古墳時代の土器で占められ後述する。

A—1～6までの調査地点では、土器片の出土は散発的で、A—五では二二片ほどである。

A—1～2では土坑二基、ピット四基を数え、それぞれに当該期の土器片、石屑（剝片）が混入していた。

A—3～4には古墳時代の住居址があって後述する。A—5は前述したほか、平板な石が二個見られ、A—六の一部からはピットが一基検出されている。

G地点では北によって土器片が多く集中し、黒耀石をはじめ、他の石材、チップなどがみられ、この下層から土坑が検出された。その他の地点では散発的な土・石器片の検出で、東側に多く発見されている。

そのほか、ピットが一四基検出されている。

次に古墳時代の遺構と遺物のありかたについてみると、B—1からは古墳時代の土器が集中して検出された。これは壺・高坏・坩・甕などの破片で、古墳時代Ⅱ期新段階（『長野県史・考古資料編』）とみられ、次に述べる住居址も同時期と推定される。

古墳時代住居址は、A—3～4の間に位置し、一辺五㍍の隅丸方形の住居址で、壺・坩・甕などが検出されているが、一部分の検出のため、柱穴その他はみつかっていない。

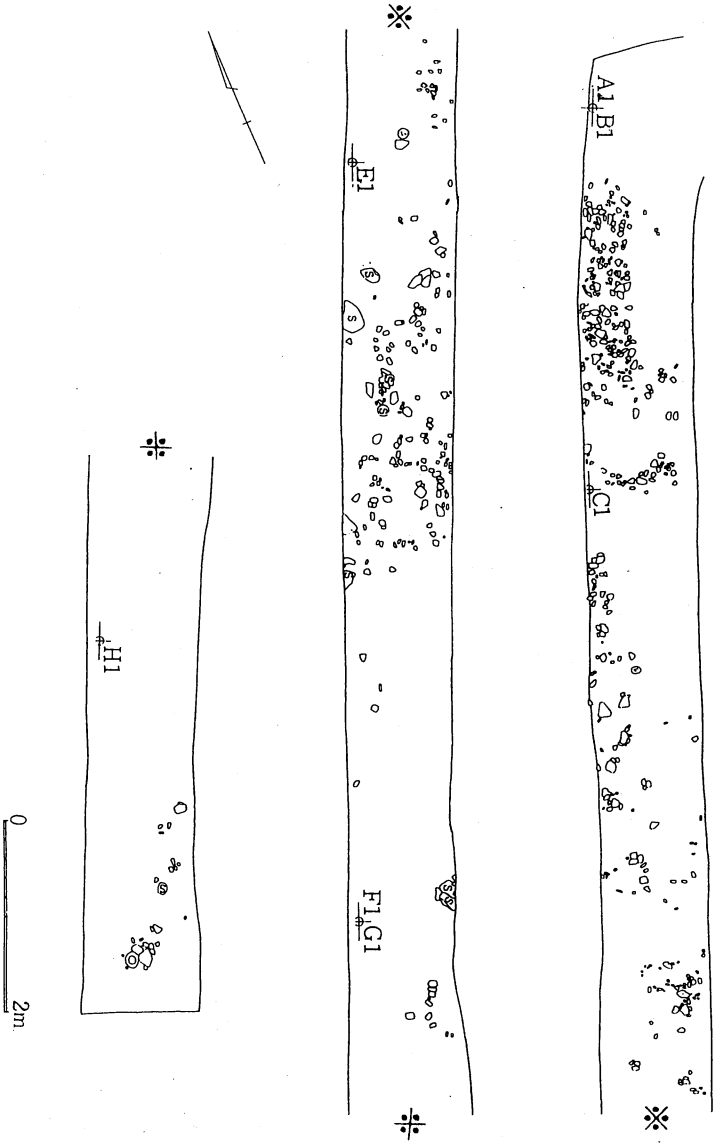

図7　遺物検出図（1）

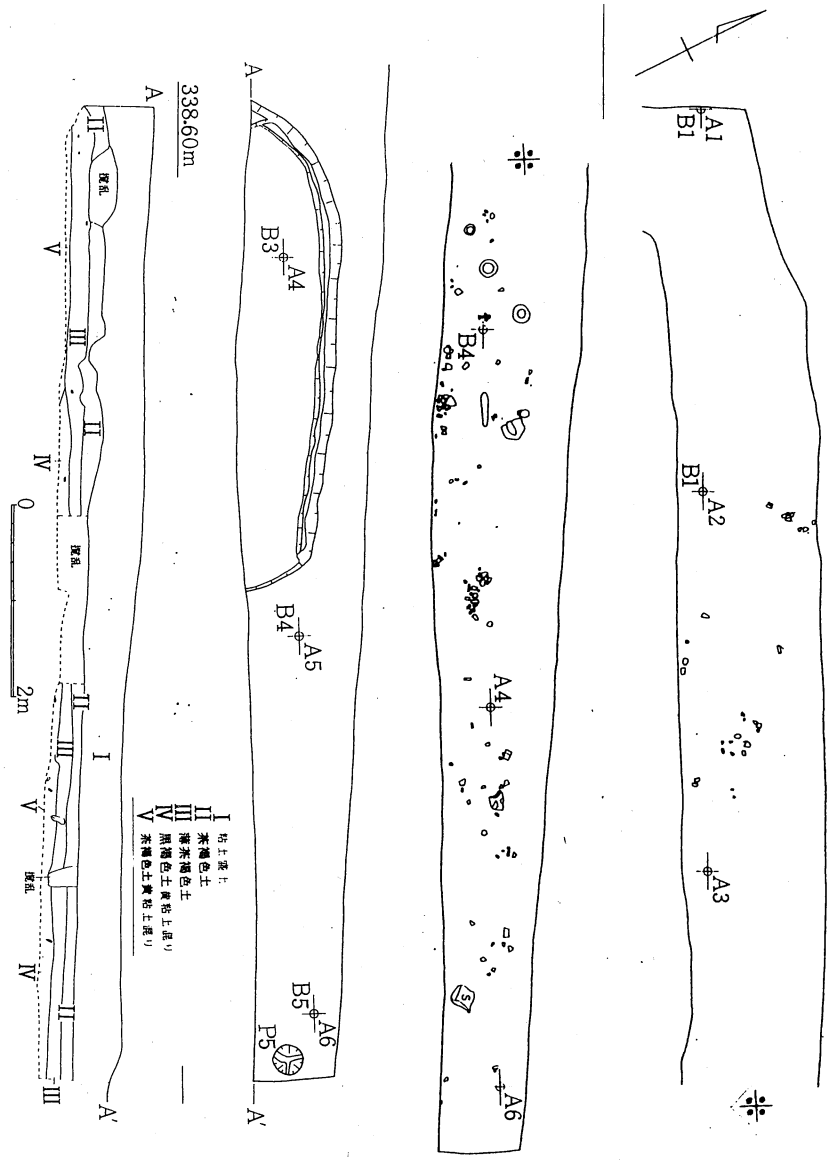
A1
B1
A2
B1
A3
A4
B4
A6
A5
B4
A4
B3
A6
B5
P5
A
A'
338.60m
A
A'
I 粘土質土
II 茶褐色土
III 暗茶褐色土
IV 黒褐色土質粘土混り
V 茶褐色土質粘土混り
攪乱
0
2m

図８　遺構・遺物検出図（２）

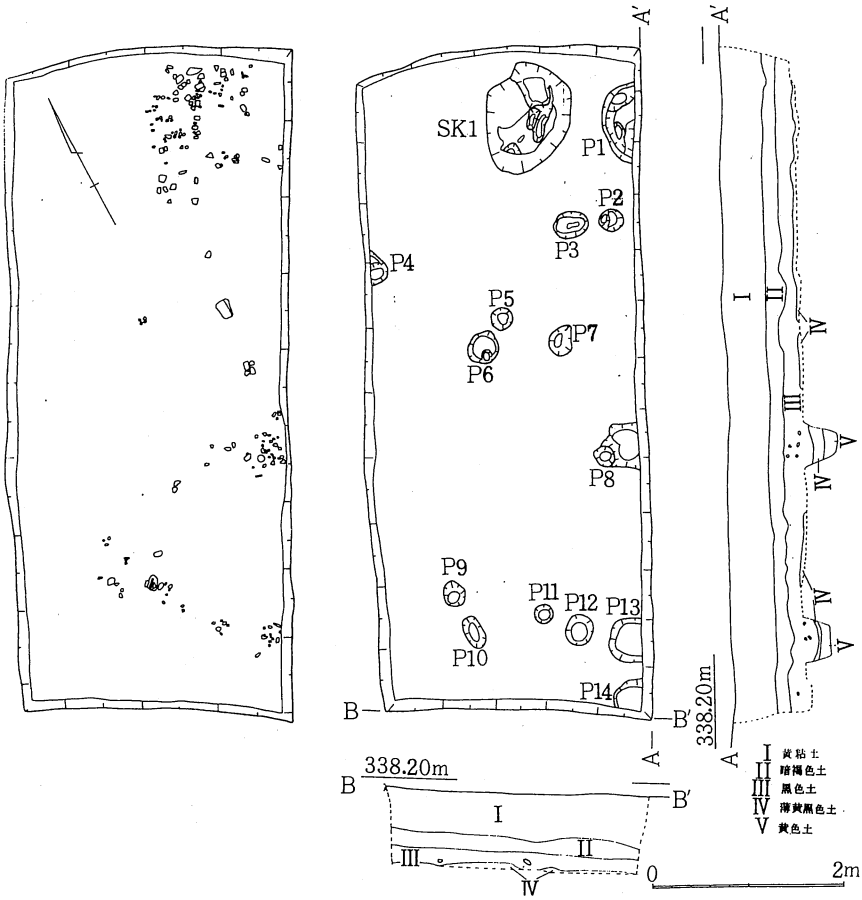

図 9　G地点遺構・遺物検出図

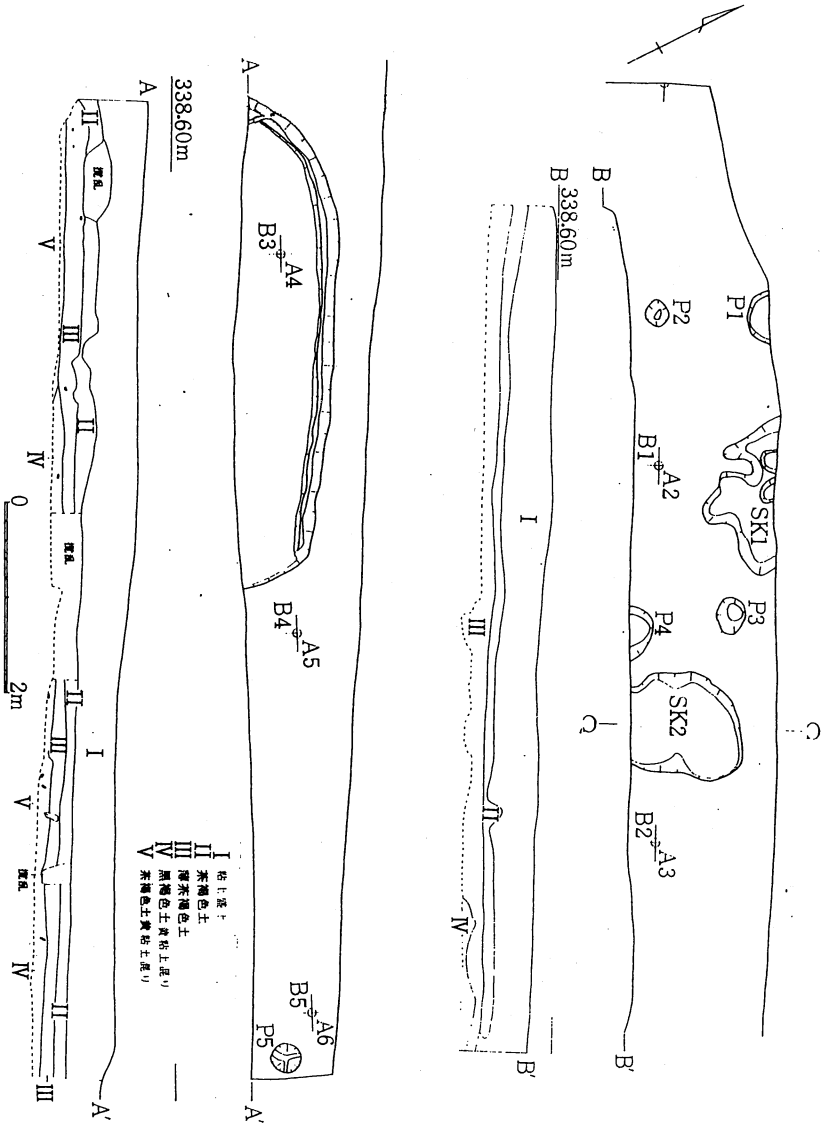
P1
P2
P3
P4
P5
SK1
SK2
A2
A3
A4
A5
A6
B1
B2
B3
B4
B5
B
B'
A
A'
C
C'
338.60m
I
II
III
IV
V
0
2m
I 粘土質土
II 茶褐色土
III 暗茶褐色土
IV 黒褐色土(粘土混り)
V 茶褐色土(黄粘土混り)

図10　遺物検出図（3）

6 遺物

(1) 縄文時代の遺物

一 土器

今回の調査で出土した土器の量は、コンテナ（60×38×20）三箱分である。この中から特色のある土器片を選んで実測図及び拓本で示した。

浅鉢（図11・1）器壁が屈曲をもち、そこに縦に四組の沈線がみられるもので、諸磯式の第八様式―C式古段階―（谷口一九八九）の土器で、群馬県糸井宮前遺跡107号住居址から出土しており、この方面から系譜のたどれる土器である。

浅鉢（同2）器壁が二段になって外ぞりした浅鉢形土器で、中段に縄状の沈刻である。様式と系譜は前者と同じで、時期は一段階古相である。

拓本で示した（図12・1～23）（図13・24～48）（図14・49・69）が縄文時代の土器で、諸磯式b式段階からc式段階のものである。

b式に属する土器は、太い沈線の間に竹管C字文の見られる（図12・3）、竹管による斜格子文の交点に円点の見られる

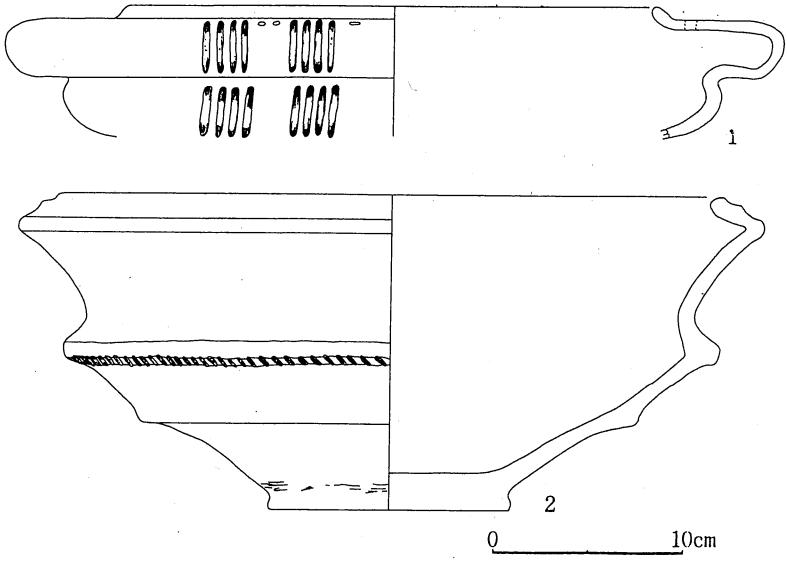

図11 縄文土器実測図

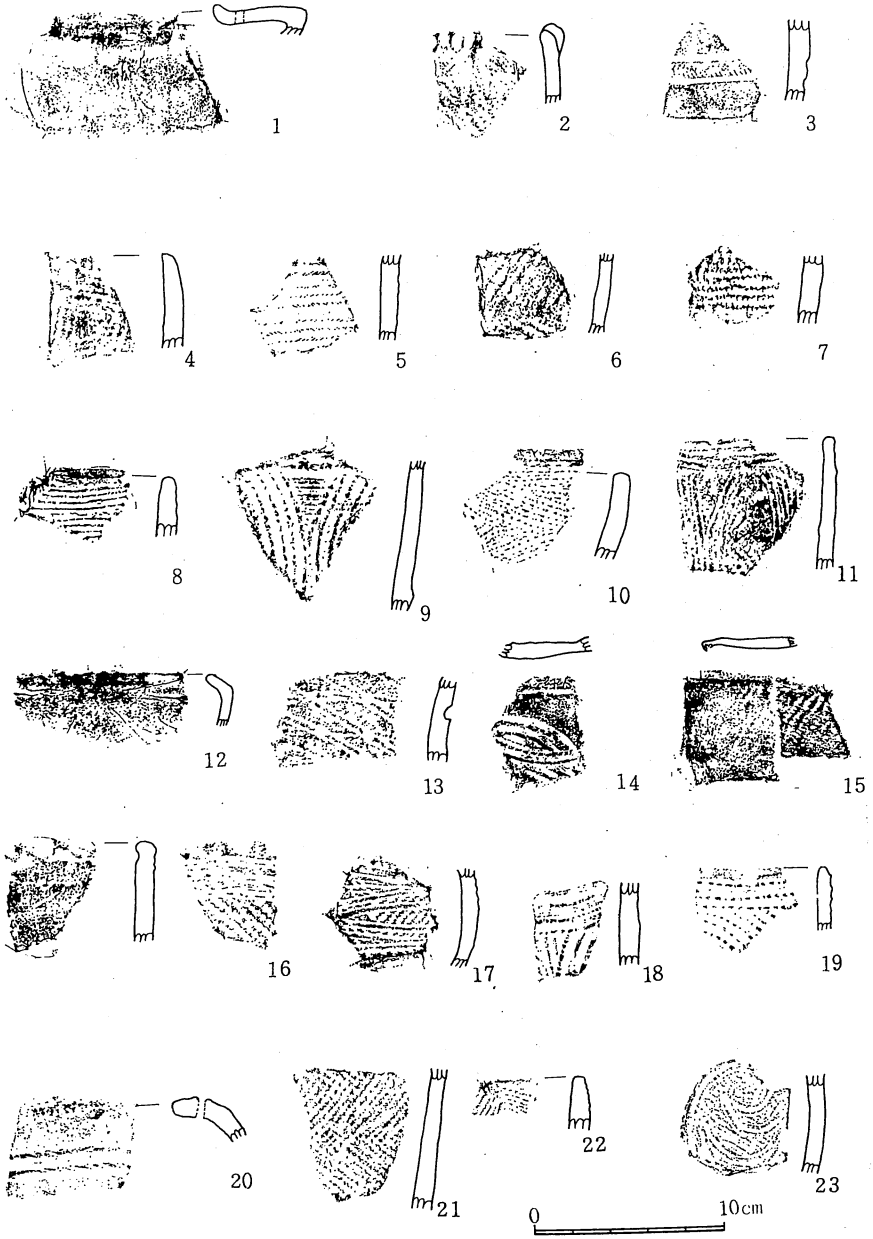

図12 土器拓影図（1）

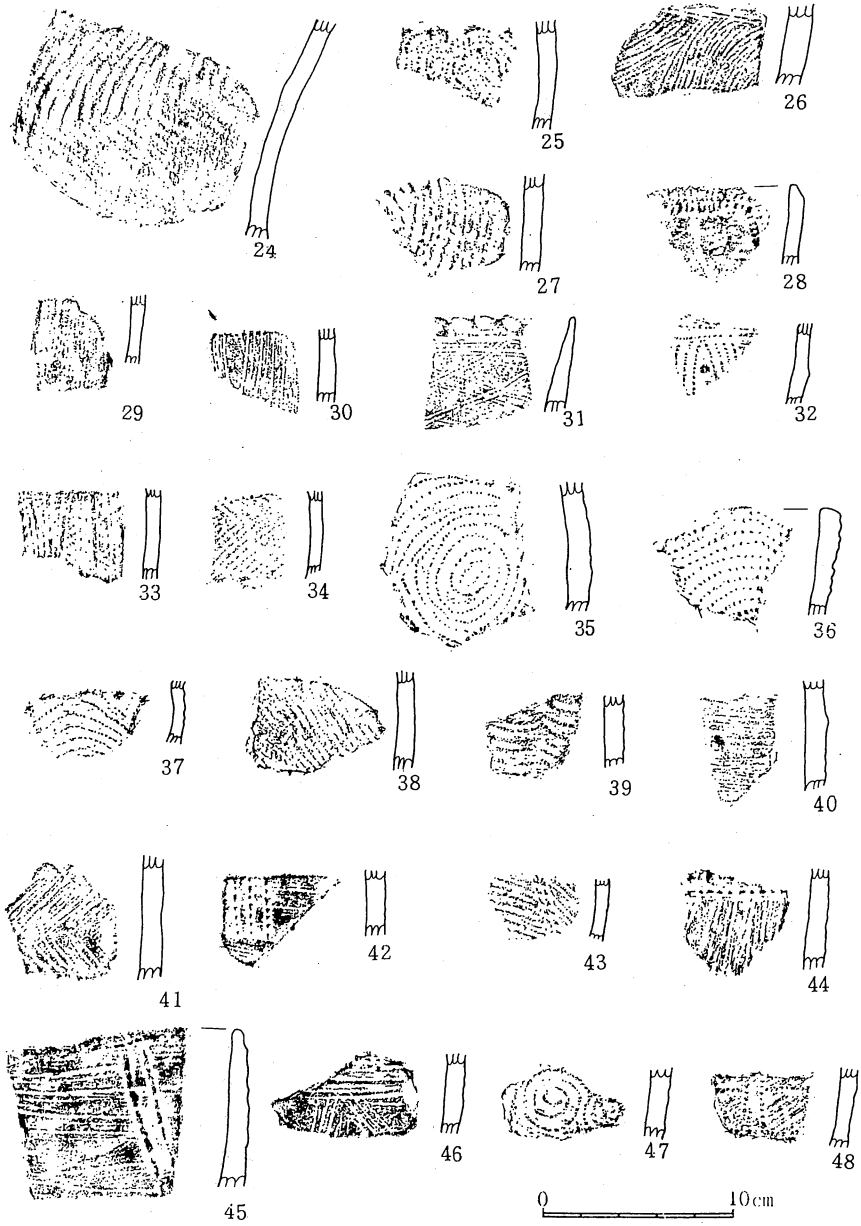
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
44
45
46
47
48
0
10cm

図13 土器拓影図（2）

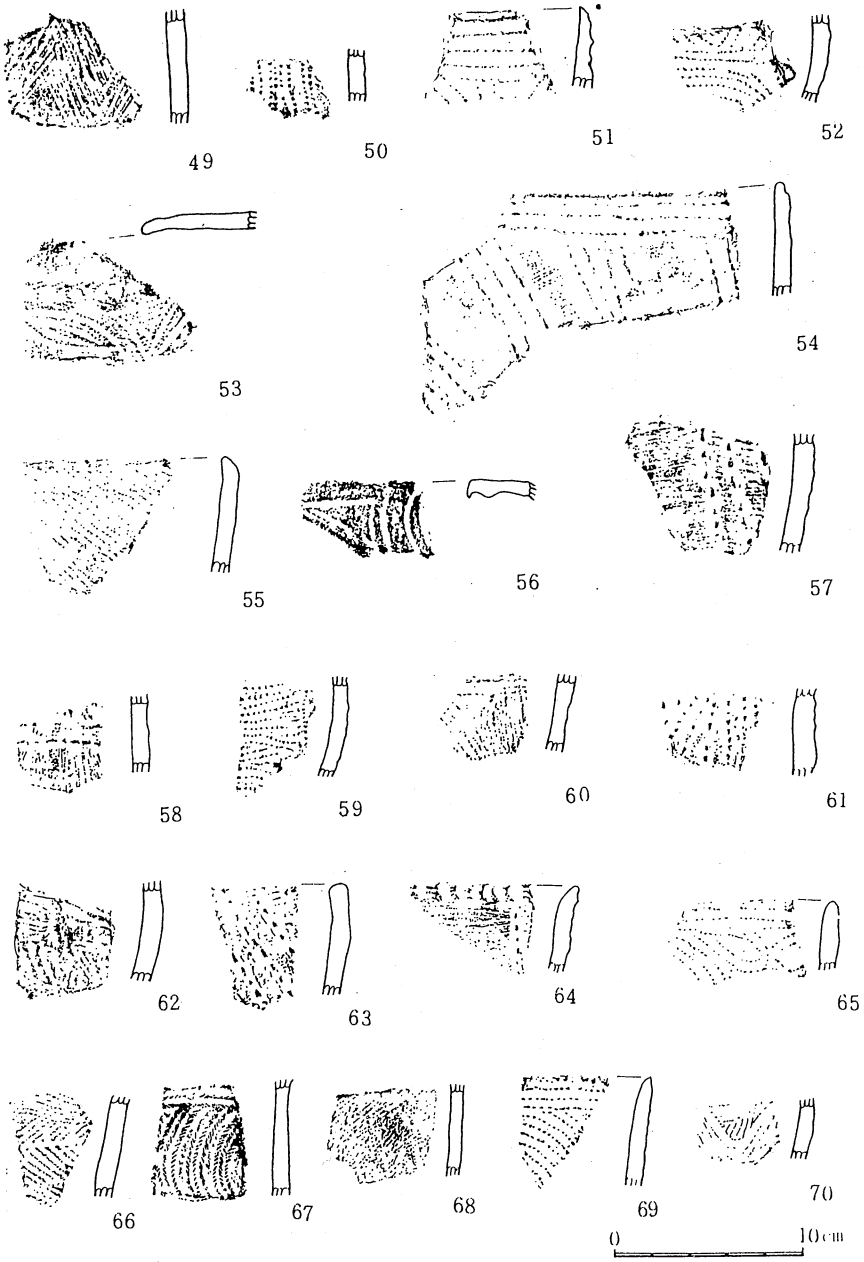

図14 土器拓影図（3）

土 器 検 出 表

表3

図版番号	出土位置	年月日	備考	図版番号	出土位置	年月日	備考
1	A－5	93.08.30		37	E－1	93.08.30	
2	表採	93.08.09		38	E－1	93.08.30	
3	表採	93.08.09		39	E－1	93.08.30	
4	表採	93.08.09		40	E－1	93.08.30	
5	表採	93.08.09		41	E－1	93.08.30	
6	表採	93.08.23		42	E－1	93.08.30	
7	表採	93.08.25		43	H－1	93.08.21	
8	表採	93.08.21		44	E－1	93.08.30	
9	表採	93.08.23		45	E－1	93.08.30	
10	B－1	93.08.30		46	E－1	93.08.30	
11	C－1	93.08.20		47	E－1	93.08.30	
12	J SK－1	93.09.02		48	E－1	93.08.30	
13	J SK－1	93.09.02		49	F－1	93.08.19	
14	SK－1	93.09.01		50	G	93.08.30	
15	J SK－1	93.09.02		51	G	93.08.29	
16	J. Skの下	93.09.02		52	G	93.08.29	
17	A－2 P－2	93.08.02		53	E－1 No.1	93.08.30	
18	表採	93.08.09		54	J	93.08.31	
19	J SK－1	93.09.01		55	J	93.08.31	
20	C－1	93.08.30		56	J	93.08.31	
21	C－1	93.08.30		57	E－1 No.4	93.08.30	
22	C－1	93.08.23		58	J	93.08.31	
23	C－1	93.08.30		59	G	93.08.30	
24	C－1	93.08.31		60	G	93.08.27	
25	D－1	93.08.20		61	G	93.08.29	
26	C	93.08.30		62	H－1	93.08.21	
27	D－1	93.08.20		63	J No.4	93.08.31	
28	D－1	93.08.21		64	J No.3	93.08.31	
29	D－1	93.08.21		65	J No.3	93.08.31	
30	D－1	93.08.27		66	J No.3	93.08.31	
31	D－1	93.08.30		67	J No.1	93.08.31	
32	D－1	93.09.02		68	J No.3	93.08.31	
33	D－2	93.09.02		69	J No.3	93.08.31	
34	E－1	93.08.23		70	F－1	93.08.19	
35	E－7	93.08.23					
36	E	93.08.30					

土器実測表（古墳）

表4

番号	出土地点	器形	寸法（㎝）			色調		整形・調整	形態の特徴	系統など	残存
			口径	底径	器高	内面	外面				
1	E－1	浅鉢	28			黄喝色	赤喝色	砂粒あり・堅緻	屈折した器壁	ヘラ磨き良好	1/5残
2	No.1	浅鉢	≠34.5	12.7	11.85	淡黒喝色	暗赤喝色	ヘラ磨き良好	胎土砂粒多し		1/4残

（同13）、本葉文の（同14）赤彩痕の残る、浅鉢の口縁で浮線文のみられる（同20）、同じく浮線文と木葉文の見られる浅鉢の口縁（図14・53）、同じく木葉文の沈線のある（同56）などで、浮線文の密に施された（図12・5）、（図14・67）などである。

縄文の施された土器は、図示したものはすくないが、量的には多く、諸磯a式段階からこの地方の卓越した文様であり、関東地方とは異なった、地域相を示しており、羽状縄文（図12・21）、（図13・24）、（同34）などがあり、細い縄目から粗い繊維で作られたものまで多種にわたっている。

結節状浮線文、細い沈線のみられるものは、c式に属するもので、縄文前期末葉段階にわたっている。

これらの文様はかなり変化にとんでおり、細い隆帯を盛り上がらせて、竹管文を施した手法には、繊細のものがある。

これらの土器は、（図12・9・18・19・21・図13・25・27・32・35—37・47・図14・50—52・59・65・69）などである。

これらのものには、細沈線の地文の上に施されたものがあり、やや大きくて粗い結節浮線文（図13・42—45・図14・54・57・58・63）などである。これらの土器には、口縁に刻みなど施して（図14・64）おり、波状口縁を呈する土器が多い。

縄文を地文として竹管による平行文のみられる土器は、（図12・16・17・23・図33）などである。これに細い平行線によって羽状、集合、レンズ状に施文されている土器は、（図12・8・図13・40・41）などで円点が施されるものがある。半隆起帯にヘラキリが施されたものは、（図13・27）で今回の調査では、類例が少なかった。

このように今回調査した地点の土器、主としては、諸磯C式段階に平行する土器群で、曲線を描く結節浮線文の土器は、C式でも新しい段階の土器である。

二　石器

今回の調査で検出した石器は、縄文時代前期に属するもの

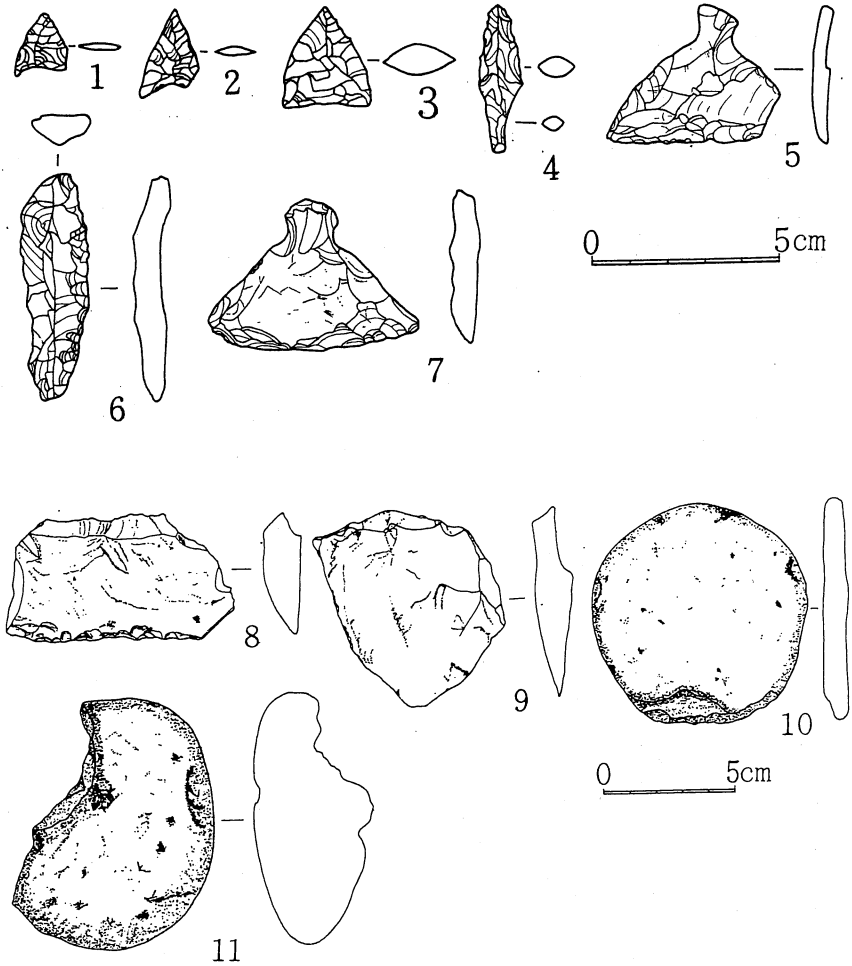

図15 石器実測図

石製品観察表

表5

No.	出土位置	機　種	石　　質	年月日	備　　考
1	B－1	石　鏃	玄武岩	93.08.26	
2	A－1	石　鏃	黒曜石(白)	93.08.30	
3	B－1	石　鏃	黒曜石(白)	93.08.31	
4	G	石　鏃	玄武岩	93.08.31	
5	C－1	石　鏃	安山岩	93.08.30	
6	A－5	石　鏃	黒曜石	93.08.27	
7	B－1	石　鏃	安山石(玄武岩)	93.08.30	
8	表　採	石　鏃	珪　岩	93.08.19	
9	C－1	石　鏃	頁　岩	93.08.21	
10	E－2No.2	石　器	安山岩	93.08.30	
11	表　採	石　器	安山岩	93.08.19	

土器実測表（縄文）

表6

番号	出土地点	器形	寸法(㎝) 口径	底径	器高	色調 内面	外面	整形・調整	形態の特徴	系統など	残存	備考
1	A－4 SB1	坩			7.5	淡赤喝色	淡赤喝色	ヘラ磨き．ナデ			2/5	
2	D－1 SB1	壺 口縁	10.1		10.1	暗喝色～黒色	暗喝色～黒色	ハケメ、磨き 内部オサエ			完	
3	No.1	坩				暗喝～黒喝色	暗喝～黒喝色	ハケ整形痕残 堅	砂粒少		2/5	
4	B－1 No.2	高坏				暗喝色	暗喝色	ハケ整形後、ヘラ磨き　堅				
5	A－1 SB1	坩	11.5	丸	残8.0	黒色	暗喝色	堅	砂粒多し			
6	C－1	壺 口縁	20.4		残7.5	黄喝色	黄喝色	ナデ、ヘラ磨き 堅	二段口縁、鉄分粒多し		残1/5	くびれ移動に便利
7	B－1 No.3	坩				暗喝色	黒色 暗喝色	外ナデ良好 内ナデ			3/5	
8	B－1 SB1	壺 口縁	12.6		残4.5	赤喝～黒喝色	赤喝～黒喝色	観察不能	二段口縁		1/5	二次火熱
9	No.4	坩				赤喝～黒喝色	赤喝色				口縁部1/4	

で、石鏃（図15・1―3）、石錐（同4）石匙（同5・6）横刃型石器8・剝片石器（同9）・石錘（同10）・凹石（同11）などである。このうち正三角形に近い形の石匙は、この時代の特徴を現しており、石錘は千曲川の漁労に関するものだろう。

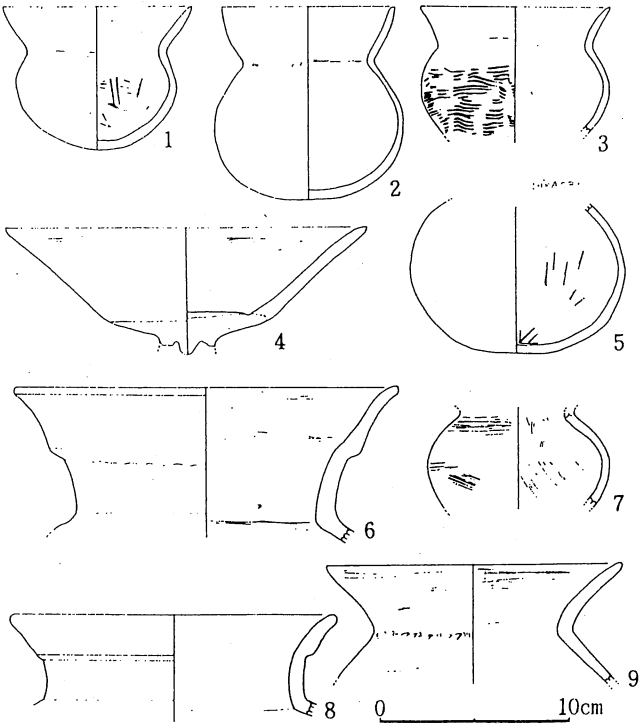

図16　古墳時代土器実測図

(2)　弥生時代の遺物

一　土器

この時代に属する土器は、（図14・70）に示したものだけである。縄文を磨り消して櫛描波状文が施されたもので、栗林1式段階のものである。

(3)　古墳時代

一　土器

土器は一号住居址とB1地点に集中して見られたものである。一号住の図示した土器は、坩（小型の壺）（図16・1・2・5）で壺口縁が（同6・8）である。このうち壺は二段口縁で成型され、この形式から古墳時代Ⅱ期新段階（『長野県史・考古資料編』）のものと推定される。

その他の土器は、B―1古墳時代土器集中地点出土で、前者と同時期のものである。後にこの西方を発掘調査したが、該当期の住居址は発見されなかったので、この東の未発掘地点に存在する可能性がある。

7 考察

立ヶ花遺跡は古くから縄文時代の遺跡として知られていた。しかし学術的に調査されたのは、『中野市誌』発刊のための事前調査（金井1977）からである。

平成元年及び二年度に、高速自動車道建設の関連事業、新立ヶ花橋建設に伴う取り付け道路建設に伴う遺跡用地内の発掘で住居址二を確認し、多くの成果を挙げている。

このようにこの遺跡の性格が僅かづつ解明されてきた。また昭和五七年調査した市内大俣の姥ヶ沢遺跡でも同時期の遺物が少量認められ、諸磯C式段階から末葉段階、中期初頭段階と、土器の変遷が認められ、文化の交流がよみとられる。

このように県下の該当期遺跡の資料の増加により、前期終末の諸様相について、「中部高地における縄文前期末葉土器群の編年」（赤塩・三上1993）において型式的系統関係において器形、文様構成、文様要素などの検討から前期末葉土器群の従来試みられた、文様類型別の段階区分に否定的であり、現在掌握されている前期末葉土器の文様要素の大半は、諸磯式Cから伝統的に受け継ぐことが理解されると、している。

古墳時代の住居址は、立ヶ花遺跡で未報告も含めて、三箇所以上確認しており、散在している。外来系土器のみられる時期から経過して、この地方の土器で占められる時期のもので、この地方の古墳時代の変遷を知る資料である。

（檀原　長則）

参考・引用文献

金井正三「中野市立ヶ花遺跡出土の前期縄文土器について」『高井』41号　1977

中野市教委『姥ヶ沢遺跡』　1983

小林達雄ほか『縄文土器大観』谷口康浩「諸磯式土器様式」1989

中野市教委『立ヶ花遺跡』　1991

赤塩仁・三上徹也「中部高地における縄文前期末葉土器群の編年」第6回縄文セミナー『前期終末の諸様相』　1993